

区制100周年記念

みなとの100年、みんなの物語
～これまでも これからも この地域と～

港区には、地域ごとに紡がれてきたまちの物語があります。区制100周年を機に、その過去と今を語り合い、これからの未来をともに思い描くインタビュー企画をお届けします。

市岡地域

港区中央部にある市岡エリア。区役所や警察署も置かれ、区の中心的なまちのひとつです。地名は、江戸時代に市岡与左衛門らが開発した「市岡新田」に由来するといわれています。今回は、市岡エリアで地域ネットワーク委員会会長を務める藤田さんに、地域見守りコーディネーターの溝口さん、市岡地域活動協議会の横田会長の同席のもと、お話を伺いました。

北海道から大阪へ、地域と歩んだ30年

藤田さんの出身は北海道。結婚を機に、大阪市港区に移り住みました。夫の祖母が婦人団体に参加していたことがきっかけで、いつの間にか地域活動に関わるようになったといいます。PTA、地域振興町会の女性部長、民生委員などを歴任し、活動歴は約30年に。そして昨年、地域ネットワーク委員会の会長を務めています。さまざまな役割を担うことについて藤田さんは「やってくれへんか?」と言われたら、はいよ!という感じなんです(笑)」と話します。「子どもの頃から人のお世話をするのが好きで。多分、性分なんだと思います」。

その言葉とおり、敬老の名簿を作る際は一軒ずつ訪ね歩いたり、台風の時は近所の一人住まいの方を自宅に避難させたり、民生委員の見守り対象の方を毎月訪ねたりと、地域の人々への気遣いがとても細やか。それも、特に意識をしているわけでも、義務感でもないといいます。「民生委員として、というより、普段のお付き合いの延長ですね」。

「楽しみながら一致団結」が市岡らしさ

そんな藤田さんについて、溝口さんは「誰より



も地域を想い、地域をよく知っている方」と評します。「困りごとのある方をいきなり訪ねても、話はしてもらえません。藤田さんは、少しずつ顔なじみになって、本音を話してもらえる関係性を地道に築いてこられたことが、本当にすごいと思います」と話します。

藤田さんを「頼りになるパートナー」と語るのは、30年の付き合いになるという横田会長。市岡地域は団結力が強く、みんなで力を合わせて地域を良くしていこうという気持ちがあるといいます。けれども一方で、マンションが増えて町会への加入が減ったり、空き家や民泊が増えたりという課題も。若手が少なく、世代交代が進まないという状況もあるといいます。それでも今年は6年ぶりに盆踊りを開催するなど、地域の人たちが顔を合わせ、つ



ながれる機会を大切にしています。「冗談を言いながら、楽しく活動できるのが市岡のいいところ。これからもみんなに喜んでもらえることをやっていこうというのは、藤田さんともいつも話してますね」。

「ありがとう」と言われなくても

これからの活動について「まだ委員長になったばかりなので、安心してもらえるように努めていきたいですね」と藤田さん。長年にわたって地域活動に力を注いできた理由とやりがいを伺うと、「ありがとうと言ってもらえたらうれしいですが、たとえ言われなくても、自然とやってしまうんです。おせっかいな性分ですから」と笑います。

実際、13年間続ける子どもたちの登下校の見守りなど、日々の関わりも欠かせません。地域活動は、藤田さんにとって生きがいであり楽しみそのもの。誰もが安心して暮らせる、明るく元気な市岡を目指して、藤田さんや横田会長、溝口さんの取り組みはこれからも続いていきます。



写真左から藤田茂子さん、横田郁夫さん、溝口弘美さん

八幡屋地域

八幡屋エリアは港区南西部に位置し、江戸時代に八幡屋忠兵衛が開発した新田から発展した地域です。戦前には海運景気で賑わい、港湾労働者の町とも言われました。今回は、地域の暮らしの中心を担ってきた八幡屋商店街について、八幡屋商店街振興組合前理事長の角さん、現理事長の伊藤さん、八幡屋市場の高木さんにお話を伺っています。

戦後の復興から始まった商店街

八幡屋商店街は戦後の復興市場から始まり、昭和24(1949)年に八幡屋市場へ再編されたのを機に発足しました。その頃に野田から引っ越してきたという角さんは、「商店街の中をトラックがバンバン走ってました」と当時を振り返ります。その後、盛土による地盤のかさ上げや区画整理による道路の拡張が行われましたが、商店街の姿はほぼ変わらず。伊藤さんが営む「光文具店」も同じ場所にあるといいます。

隣接する八幡屋市場、港中央市場も合わせて組織化し、昭和51(1976)年にはアーケードを設置。その頃は近隣にお店が少なく、商店街は大いに



賑わったといいます。「あちこちから自転車で人が来て。お客さんがすごかったんですよ」と高木さん。自転車を停める場所もなかったほどで、「大変でしたけど、今となれば懐かしいですね」と角さん。商店街にとって、とても良い時代でした。

赤い椅子がつなぐ、人と人

近年は、近隣に大型スーパーなどができた影響で客足は減少傾向に。角さんは「消費者の気持ちになったら、ワンストップで買い物できるスーパーが便利なのはわかります」と理解しつつも、商店街に賑わいを取り戻そうと努力を続けています。その取り組みのひとつが、「八幡屋バル」や「八幡屋まつり」といったイベント。過去には「大阪ごちそうマラソン」という大ヒット企画も生まれました。

大規模なイベントだけでなく、日常的な工夫も行っています。店舗前に置かれた赤



い椅子には、高齢者の方が座って話している姿が見受けられ、買い物途中に30分ほど話し込む人も。「ここには買い物だけでなく、人と話すことを楽しみに来られるんです」と伊藤さん。赤い椅子は、商店街が人と人をつなぐ場であることを象徴しています。

とはいえ、椅子が定着するまでには紆余曲折があり、「ベンチを置いたらそこで勝手に宴会されたり、大きな植木を置いたら犬のトイレになったり(笑)」。試行錯誤しながら、商店街の在り方を模索してきました。

「変わりゆくまちと商店街のゆくえ

ここ数年の課題は「役員のなり手不足」。商店街内にもマンションが建てられて店舗数が減っている上、組合に入らない店舗もあるといいます。「魅力ある組合を作らないといけなけれど、なかなか…」と伊藤さん。それでも最近新しい店舗が加入するなど、少し明るい兆しも見えています。

高木さんが「八幡屋商店街の歴史は、港区の歴史そのもの」と言うように、戦後の復興から高度成長期の賑わい、そして高齢化やコロナ禍の影響を受けて変化してきた八幡屋商店街。その未来について、角さんは「僕は100年先はいないので(笑)。でも、日本の人口が減っている中で、どう国力を保つのか、そこは気になります」と話します。伊藤さんは「夢洲にIRができれば、従業員の住まいがこの辺りにできるのでは。そうすると、街自体が変わっていく気がします」と語り、高木さんは「民泊も増えているので、国際化を進める上でルールをどう定めるかが大切です」と締めくくりました。



写真左から高木博さん、角正基さん、伊藤雄二さん